



完全保存版 「自然素材住宅塾」



今の住まいと将来の住まいに役立つ情報満載

こんにちは。駿河屋の九代目当主一樹です。

僕にはこの春、高校3年になる長女と中学3年になる長男がいます。自分の部屋をひとりひとり与えたのは去年。それまでは二人で一つの部屋を子供部屋としていました。勉強などは主にリビングを使っていました。元々自宅はダイニングとリビングを別けていたのですが、大きな6人掛けの無垢の座卓にして、座椅子の生活にしたら、家族がそのテーブルを囲んで過ごすことが多くなりました。幼児から思春期の子供の生活空間は、とっても大切なんですよ。今日はそんなお話し。

それでは、今月も子育てママにお役にたてる、おうちの中で大切なこと、発信します！

【子供の成長に大切な子供部屋の話し】

住まい作りにおいて、子供部屋の概念、いろいろありますよね。子供部屋という概念、日本にはもともとありませんでした。欧米型の生活を習うように受け入れてきた戦後に「子供部屋」という概念が出来上がりました。この子供部屋、一体いつから必用だと思いますか？

ある母子家庭のお話し。

1人で娘が中学生になって突然非行に走ってしまいました。そこで、宇用曲折ありましたが、最終的に「住まい方」を変えることにしました。

その親子が住んでいたのは階段室型のアパートで、玄関に入って右側が母親の領域、左側が娘の領域という住み分けとなっていました。

母親との領域の間には、コンクリートの壁で仕切られており、玄関を 통해서しか行き来が出来ない。娘の領域には電話やテレビに冷蔵庫まであって、お互いに行き来する必要がないようになっていました。まるで母娘の断絶を表しているようでした。

このような住まいは「住まい方」に問題があります。いくら電話やテレビを取り上げても、空間構成自体に断絶されているので、関係は回

復することはできません。

結局母親は、娘との望ましい関係を保ちやすい間取りの家へ転居し、結局足かけ2年がかりで娘を立ち直らせたそうです。

その間取りとは、1Fのリビングキッチンに面して母親の部屋があり、リビングキッチンから階段を上った2Fに娘の部屋があるというものでした。

つまり、母娘が日常的に顔を合わせ、言葉を交わせる間取りなんですね。

今でこそ当たり前にならされていることですがやはり大切な事ですね。

子供部屋の役割は、親からのシェルターの役割を果たす側面もあります。

しかし普段の生活という観点で見ると、「子供が自分のテリトリーを持って、そこをコントロールする能力を磨く場」でもあります。

自分の部屋を居心地良くすることで、様々な能力が引き出されるのです。

インテリアや片付けなどで空間構成能力も高まります。

親はそれを後押しするために、あまり手を出さずに我慢することが大切です。

所有とは自己責任が発生することです。これは社会にでたら一番大切なことかもしれませんね。

また、1人で考える時間も大切です。しかし、勉強するところは自由にしてあげましょう。そんな時に、最初にお話ししたようなリビングが役に立ちます。

勉強を個室ですっとする癖をつけると、静かな場所でした集中できない大人になってしまいます。仕事場は必ずしも静かな場所ではありませんからね。

今回は子供部屋と間取りの話しをしました。最初の例のように、間取りは家族関係を悪化させるほどの大きな力を持っています。でもその逆に、家族の関係を温かく、強く、関係を築く間取りもあるということですね。

もっと詳しい内容を知りたいと言う方はメルマガ

「社長の厳選素材住宅論」で検索

ニックネームでの登録も可能です。

